

# 衣裳

森本 薫

【人物】

勢喜

舞子

千紗

嶺

日足

洋家具の入った部屋。左手に扉、正面は左の方がニス塗の引戸で次の部屋に続き、右の方に大きな桃心木のピアノが目立って見える。右手に窓。

早い春の夜。

勢喜、舞子、嶺。舞子ひとりだけが煙草をふかしてゐる。

嶺 (思ひ出したやうに)しかし、ストオブを取拂つちやつたのは一寸早まった。

舞子 晝間は随分暖いのよ。

嶺 晝間來れやよかつた。日あたりが良いんだね、察するところ。

舞子 とつても！ その窓からね、……この邊へ……こつちかな。

嶺 さうぢやないだらう、あんたの起きる時分には。

舞子 ああ失禮な。

勢喜 嶺さん初めてでしたかしら、こつちへ来てから……。

嶺 さうです。僕は……。

舞子 引つ越し手傳はなかつたから初めての筈よ。

嶺 暇な連中と違つて勤め人だからな。

勢喜 あれで前の家は随分暗うござんしてね。

嶺 さう云へばさうなやうな氣もしますね。何方向いてるかな。あの家は。

舞子 解つたやうな顔をしなくつたつていいのよ。

嶺 自分が知らないからだらう。

勢喜 西？ (舞子に)ねえ。

舞子 さうなるのかしら。

嶺 ははん。それでも女のもりだつてね。

舞子 千紗と、どう？

嶺 あれや、また、言語道斷だ。

勢喜 (笑つて)言語道斷ですな。

嶺 お母さん迄賛成なんですな。

勢喜 ——。(笑つてゐる)

嶺 少し弱つたな、それや……。

舞子 張り合がないな、さうなると。

嶺 姉と云ふ奴がよろしくないと思ふよ、僕は。

舞子 姉はいいさ。

嶺 なぜ。

舞子 ぢや、なぜ悪い。

嶺 何故も糞もない。何處も彼處も悪いとこばかりだ。(咳をする)煙草は止せ。

舞子 あんたの負けよ。それぢやア。

嶺 ん？

舞子 何て云ふ顔。アツケラカンとして……。

嶺 日本語で云ふとどう云ふことになる。

勢喜 面白いんですかねエさう云ふことが。(立上る)

舞子 寝るの、母さん。

勢喜 寝やしないよ、まだ。

舞子 ぢや、お茶でも焙れて來なさいよ。

勢喜 來なさいよ？ あべこべだね、まるで。來なさいよ、だつて……。

嶺 打つちやつときなさい。自分で焙れて來りやいいぢやないか。

舞子 あんたのを云つたげたのよ。

嶺 そんな好意があるんなら自分で起てよ。

舞子 ところが、それほど迄は無いの。

勢喜 嶺さん、姉妹二人、揃ひも揃つてどうしてかうなんでせうね。(正面か

ら去る、引戸を開くと明るい日本間と派手な夜着がみえる)

舞子 母親嘆く……。

嶺 誰だつて嘆くさ。末世に及んだね、かう云ふ女が現はれるやうぢやア。

舞子 氣はやさしいのよ、みんな。

嶺 氣はやさしくて力持だらう。

舞子 そんなにプン／＼するな。

嶺 貰ひ手が無いわけだな、これぢやア。

舞子 行つてやらないからいいよ。

嶺 今に廉賣りの札を出すんだらうがね。

舞子 餘計なお世話だい。

嶺 氣の毒だからね。他人事とは思へん。

舞子 苦勞性なのね。

嶺 相手になるな。一々逆らやがる。

間。

時計の十時を打つ音。

嶺 十時か。ぼつ／＼……。 (立上りさうにする)

舞子 もう歸るでせう。

嶺 歸らなくつたつていいさ、あんな不良少女。

舞子 ほんとに、何處をうろ／＼してゐるのかなア、今頃。夕方迄には歸るつて云つてたのよ。

嶺 行先は決つてるんだらう。

舞子 それやわかつてるけどさ、何時迄も其處にゐるんだかどうか……。

嶺 少しは厳しくしないと駄目だぜ。

舞子 したつて駄目さ。

嶺 試しにやつてみりやいいぢやないか。始つから放り出しといて……尤も意見する方があんたぢや……。

舞子 ぢや自分で云ひ給ひ。自分のあれぢやないの。

嶺 こつちが云ふんぢや追着かねえや。

舞子 そんなに、やきもきしなくつたつて大丈夫よ。

嶺 やきもきするんぢやないがね。あれぢやア、見てる方がはら／＼する。

舞子 ほんとに心配しなくつたつていいのよ、さう云ふことなら。

嶺 この家は、をかしの家だな。

舞子 信用してるのね、みんなが。

嶺 みんな曲つとると云ひたい。

舞子 でも、あんたも割合に物好きね。どうするつもり、あんな子を奥さんに

して。

嶺 生きてまま使ふよ、潰しにもなるまいぢやないか。

舞子 潰しも利かないつてことよ。

嶺 なにしろ傍に附いてる奴が悪いからね。二人で決めてるのかい、結婚なにかしないつて。

舞子 決めてなんかあやしないわ、そんなこと。

嶺 さうか。僕はまた約束してるのかと思つた。

舞子 あれね、男なんてものは何れもこれも……結局……(にや／＼笑ふ)どうしよう後……。

嶺 親父さんが生きてたら、そんなことを云はしてもおかないだらうに……。

舞子 生きてたつて……さうね……女ばかりの家つて駄目よ……。

嶺 それみろ！

舞子 それも男なんてものがあるからよ。

嶺 男の所爲にしてるのか。その癖男と遊んでばかりゐるんだから世話ない。

舞子 そいで、どう云つてるの、千紗。

嶺 どうつて、何さ。

舞子 イエスなの、ノオなの。

嶺 ノオ！ 猛烈にノオだよ。

舞子 威張らなくつたつていいわよ。

嶺 僕には彼奴の氣が知れん。あんたに氣兼ねしてるんぢやないかしらん。年上のあんたが家にゐるのに……。

舞子 そんな莫迦な！ ……筈がないわよ。

嶺 さうかな。しかし……(云ひ切つて)有る。

舞子 家ぢや絶対にないのよ、そんな……他所の家なら知らないけど……。みたつてわかるでせう。

嶺 僕は、本當に厭なら厭で、別に無理に……。

舞子 さうぢやないのよ、何云つてるの。

嶺 ぢや、どうなんだ。

格子戸に附けたらしいベルの音。

舞子 歸つて來たんぢやないかな。(立上る)

嶺 わからん、女の子の腹ん中なんて。

みえない所で障子の開く氣配、勢喜の聲で「いらつしやいませ」と云ふやうな挨拶。續いて男の聲、何か云ひながら別の部屋に消えて行く。舞子、扉に迄行くがそのまま引き返して來る。

舞子 違ふらしい。

嶺 お客様だね。(立上る)

舞子 いいのよ、放つといたつて。

嶺 ここんち、二階あるのか。

舞子 あるわよ。何故。

嶺 お客様をするやうに出來てるんだな。

舞子 張り飛ばすよ。莫迦なことを云ふと。

嶺 どうも怪しい。始終お客のある家だな。

舞子 餘計な心配ばかりしてるね、君は。

嶺 苦勞性なもんでね。(ピアノの傍へ行く)いぢつてもいいのかい、これ。

(ガンと叩く)

舞子 子供が起きるぢやないか。

嶺 あ、びつくりした。鳴ることは鳴るんだな。

舞子 お父さんの形見よ。立派でせう。

嶺 立派過ぎる。榮華の名残りか。

舞子 ふッ！ 可笑しくつて……。

嶺 子供、寝てるのか。

舞子 ——（次の部屋を指す）

嶺 パストラルだね、あの子は。仲々よろし。（ちよつと戸を開けて覗くが慌てて締める）其處にあるんだ、まづい〜。

舞子 そんなにソワ〜しないで、ちゃんとしててよ。目觸りで仕様がないわ。

嶺 ゆかなくつていいのか、あんたは。

舞子 いいわよ。煩い。

嶺 そんなら、いいけど。僕は歸るよ。

舞子 あら何故、もししるればいいぢやないの、どうせ今から歸つたつて、あれでせう、何にも……。

嶺 また、来るよ。（出てゆく）をばさんよろしく。

舞子 厭な人ね。（蹤いてゆく）言ふことがあつたら、言傳しといたげるわ。（扉口に凭れて）

嶺 お前みたいな仕様のない奴は無いつて云つといて呉れ。

舞子 そ云つとく。ん。

嶺 あんたもね。（格子のベル）失敬。

舞子、扉を閉めて次の間へ入りかけるが思ひ返して元の場所へ行く。

「舞子、舞子」と云ふ勢喜の聲。舞子、知らん顔をしてゐる。

勢喜、お茶を焙れて出てくる。

勢喜 おや。

舞子 歸つたわよ、もう。

勢喜 なんだい、そんならさうとお前……。

舞子 お茶、妾貰ふ。

勢喜 御挨拶くらゐなさいよ。折角いらしつてるのに、ちよつと……。

舞子

勢喜 それとも、こちらへ来て戴いた方がいいかしら、窮屈だから……。

舞子 どうでも……。

勢喜 いいだらう、それでも。

舞子 妾はどつちでも、つて云つてるぢやないの。

勢喜 (やれ〜と云ふ恰好で出て行く)

舞子、玄關の方へ出て行かうとする。日足、勢喜。

日足 さう云ふことはないが、やつぱり、それや洋服だとね……。

舞子 (糞町噺に)いらつしやいまし。

日足 いや、どうも……。

勢喜 さ、どうぞ。とりちらかしてをりますけれど……。

日足 いや〜、構はないで下さい。いいですよ、そのまま……。

勢喜 舞子。(坐れと云ふ身振り)

舞子 なあに。(知らん顔をして突立つたまま)

日足 仲々いい住居ぢやありませんか。新しいのが第一ね……それに木口も悪くない。此の頃は安くつて伶俐な家が建つやうになつてゐますからね。

勢喜 はあ……何時も〜勝手ばかり……一向御相談にも上らないで……。

日足 なあに、そこは此方でいいやうにやつて戴く方が私の方も勝手です。

一々御相談に上られちやア却って困るでせう(笑ふ)

勢喜 御尤もで……。前の所は日當りがよくないと申して、みんなが嫌ひます  
ものですから……。

日足 ああそりや、何と云つても明るい方がいいな。おや、(舞子に)ピアノが  
此處だね。時を得て世に出たと云ふ形ですね。かうしてみると、どうし  
てなかなか……。

舞子 おいといても無駄だから賣つちやはうつて云つてゐるんですの。(すうつ  
と出て行く)

日足 は！は！ ピアノを賣り拂つて酒庫でも建ててゐるかね。それなら賛成だ  
が……。

勢喜 我儘な子で……。どうも仕様がございません。

日足 舞子さんと私とはどうも肌が合はんらしい。

勢喜 いえ、何方様でもあのとほりなんで、他人様のおゐでの時などは隋分氣  
を揉むこともございます。片親になりますと皆ああなたでございませ  
うか。

日足 私なぞは別に氣にもしませんかね。まあ、歳をとつてくればよくなりま  
すよ。あの人なんかまだまだ、これで……。

勢喜 はあ……。もう、分らないと云ふ歳でもないのですが……。

日足 まあ、さう云へば……。幾つでしたかな、お姉さんは……。

勢喜 もう、六でございます、あなた。

日足 六ですか、すると……。

勢喜 わからないでやつてゐますんなら、またそのうちには、と云ふこともご  
ざいませうけれど、よくわかつてああなたですから……。

日足 いやもう子供を育てるつて云ふことは……私がお世話しませうかな、  
ひとつ……こんな縁談はどうでせう、私の會社にもう七年ばかり、學校  
を出てからずうつと……。

勢喜 はあ、それも、色々お話もございましてですが、當人がどうしても嫌だと申しますもので、無理にと申しますともう、まるで悪いことでも勧めるやうに云つて怒るんでございます。

日足 は！ は！ そいつは手厳しい。成程ね。そんな風になりましたかねエ。尤も嫁入りしたつて今日此の頃ぢやア……。

勢喜 之が男の子ですと、まあ、そんなにしなくつてもと云ふやうなものが……。

日足 誰かあるんでせう、そりや。仲々男のお友達も多いやうだし、その中にお氣に召したのがあるんぢやないですか。案外お母さんなどの氣の附かない……。

勢喜 それが、一向そんな様子もございせんのです。男なぞと云ふものはどれもこれも……。

日足 いや、もうその後はよくわかりました。

勢喜 (恐縮して) いえ、決して之は……妾……。  
日足 なに〜、いんですよ。まつたく、男と云ふ奴はよろしくありませんな。これで、ぢつと溫柔しくしてゐれば、別に後で困ることもいらぬし、後悔することもないんだが、時々妙な謀叛心を起すものでね。(笑ふ) いや、どうも……。

勢喜 恐れ入ります。

日足 しかし、傍から焦つてみたつて、當人の氣持が決らなきや、此奴ばかりはどうにもなりませんからな。(煙草を出す)

勢喜 左様でございます。(慌ててマッチを摺らうとする)

日足 (制して)結構です。(もう火が点いてるんで)さうですか。(顔を寄せる)  
勢喜 もう妾も、此の頃では成可く考へないやうに致してをります。あれの考へなんか汲みとらうとしたつてまるで無駄みたやうな氣が致しますも

ので……。

日足 何か商賣でもやりませんかねエ。水商賣のやうなものでも……ああいふ人にはいいかもしれませぬよ。それなら私が一つ力を入れてみて……。

勢喜 (氣無く) さあ……。

日足 (諦めて) 私ぢやア、あんまり役に立ちさうもありませんな。

勢喜 いいえあなた、もうあなた様にはこれ以上御迷惑はお掛け出来ないのです、妾達。今迄にもいろいろ御迷惑……。

日足 いや〜、さうぢやない。さう云ふつもりぢやないが……。またあれで、千紗とはちよつと流儀が違ふんですな。

勢喜 どう云ふものでございませうか。(愛想笑ひ)

日足 いや、御同様氣だけは若くつても駄目ですなア、年をとると。

勢喜 御冗談を……。

日足 御冗談ぢやない。ほんとですよ。まあ、あなただからかう云ふことも云へるんだが、もう何だか臆病でねエ、此處の鬨をまたぐのが……舞子さんは勿論だが、私は此頃千紗の顔をみるのも怖くなりました。

勢喜 (――俯向いて) 妾はもう、三年此のかた、子供達にのび〜話の出来たことはございません。

日足 時代が違ふんですな。ざつと三十年ですからな。これで、子供でもなかつたら、私も、此の家へはとづくに足が向かなくなつたかもしれませぬよ。(笑ふ)

勢喜 あの子達に致しましても、一體あれでお互どう思つてゐるんでせうか。たつた二人の姉妹なんですが……。

日足 それや、お母さん。あんな姉妹と云ふものも先づないでせう。私もあれだけには謝りましたよ。

勢喜 はあ。でも、此の頃ぢやア……兩方から……何て云ふんでせうか、斯う……。

日足 私が出入りするのがいけないんでせうな、やつぱり。

勢喜 まあ、あなた、どうしてそんな……。

日足 いや、さうなんですよそれや。それは私にもよくわかつてるんですが、やつぱり、氣になると、捨てておけない氣がしてつい……。

勢喜 左様でございますともあなた。そんなことを兎や角思つては罰が當ります。

日足 まあ、舞子さんにも、もう少し我慢して貰つて、そのうちには千紗のことも何とか……。

勢喜 滅相な、舞子があなた……命を拾つて戴いたのも同様なあなた様をどうしてそんな……。

日足 いや、それを云はんで下さい。それを云はれると全く、穴へでも入りた

勢喜 舞子にしましても、病氣が癒つたからと申して以前のやうにお店に出ると云ふわけでなし、と云つて、いくらやかましく申しましても縁談には耳も傾けて呉れませんし。御近所の手前でも……。

日足 まあ働くと云つても女の仕事なんて樂ぢやありませんからなア。殊にあの人のやうに長い病氣の後ぢやア、そいつはちよつと……。

勢喜 あなた様の黙つておゐでになるのをいいことにして、みんなく仕たい三昧をしてをります。それを考へると妾は、ほんとに申し譯もない氣が致します。

日足 お母さん、困りますなア、いつもくそれぢやア。

表が開く、亂れた足音。

嶺の聲 さあ、這入れ！ 酔っ拂ひ！

千紗の聲 嶺！ もう歩けない妾。

嶺の聲 嘘つけ、歩いてたぢやないか、そこ迄。

千紗の聲 嘘よう。そこ迄車で送つて貰つたのよ。家の前で降りるときまりが悪

いから……横町の煙草屋の前で……。

嶺の聲 そんなこと、どうでもいいから這入れ。ほら、人がみてるぢやないか。

勢喜 歸つて来たやうでございます。(立上る)

日足 さうらしいですね。

舞子の聲 あら、とう／＼歸つて来たのね。何處で遊んでたの今時分迄。さあ、手を持つたげるから……駄目よ、そんなにフラ／＼しちや、態つとしてるのね……。

舞子と嶺に支へられた千紗。子供々々した少女風。

嶺 骨を折らせやがった、ほんとに。女の酔っ拂ひなんて仕末に悪い。(日足に氣が附いて會釋する、日足も慌てて應へる)

勢喜 それはどうもお世話さまでした。何處でお會ひになりましたのですか。

嶺 歸らうと思つたら、横町からフラ／＼やつてくるのがどうも見た事あるやうに思へたもので、引き返してみたら、果して……。

勢喜 まあ、それや……。

千紗 (扉口に寄掛つたまま、にこ／＼して)見たことあるつて何だい。自分の變人のことぢやないか。

舞子 あんたどうしたの、オーヴァの裾がこんなに汚れてるわよ。膝をついたんぢやない、何處かで……。

千紗 ううん。妾、知らん。

舞子 さ、お脱ぎなさい。脱がしてあげるから。そら、手を出して……そつち

も……厄介な女の子ね……(まるで母親以上の優しさで)手袋片つ方ど  
うしたの。

千紗 手袋と……ポケット……ぢやないかな。

舞子 (探してみても無いわよ、何處かへ放つて來たのね。

千紗 さうかなア……そ云へばポケットへ入れた憶へはないや。

嶺 何云つてやがる、憶へなんかあるかい、そのざままで……。

千紗 まあいいや、一つでまけとけ。姉さん、あんた飲んだことある、あれ……  
…。

舞子 (オーヴァアや帽子をピアノの上へ持つて行きながら) あれぢや、わから  
ないよ。何さ。

千紗 ほら、ね。何とか云ふ、活動でよくやるでせう。嶺は？

嶺 ないよ。こつちは。

千紗 ぢや何て云ふの、あれ。教へてよ。教へるだけならいいでせう。

嶺 他人の飲んだもの迄知るもんか、自分で憶ひ出せ。

千紗 まあ、どつちでもいいや、そんなこと。ああ、頭が痛い。割れさうだ。

日足 掛けたらどうだい、此處へ來て。

千紗 日足さん。いらつしやい。氣が附かなかつた、妾。(にこ〜笑ひなが  
らその場へ坐つてしまふ)長い間待った？

嶺 おい〜、こんな所で坐つてしまつちやいかん。(立たせようとして手  
を引つ張る)起たないか。おい、ひっぱたくぞ。

千紗 抜けるぢやないか、そんなに引つぱると。ぢやア、抱っこしてつて呉れ  
るか。

嶺 此奴！ バケツで水をぶっかけてやりたいな。恥しいと思はないのか、  
女の癖に酒なんか飲みやがつて。

舞子 嶺さん、照れてないでさつきと引つ抱へて來てしまひなさいよ。他人が

見てたつて構はないわよ。(日足の方を見据えて)ねえ、母さん。

勢喜 ——(もぢくする)

嶺 うっかり傍へ寄つて小間物店でも出されちやア困るからね。

舞子 大丈夫、そんなに酔つてやしないわよ。そんな風をしてるだけなのよ。

勢喜 (舞子に)あなた!

千紗 (嶺に)嶺。妾のお姉さんはね……妾のことをいけない女だと思つてるのよ。知つてる。ちやんと妾……知つてるんだ。

舞子 莫迦ね。そんなこと思つてなんかあやしないよ。

千紗 いいえ、思つてる。ぢや……思つてないなら、なぜ……妾に……今みたいな……。

舞子 何よ、今みたいな……。

千紗 何か云つたわよ、今さつき……何て云つた、嶺……

嶺 知らんよ俺は。酔つ拂つて煩いと云つたんだらう。

千紗 それはあんたが云つたのよ……あんたの云ふことなんか妾はちつとも氣にしてやしないんだ。彼女は……妾を……輕蔑してゐる。

舞子 酔つ拂ふとすぐそれだ。自分の勝手に自分が酔つ拂ふんだからちつとも構はないけれど、酔つ拂つたやうな顔をして妾を虐めるのは止して頂戴。

千紗 (大きな聲で)妾が?(ひよろく立上る)妾がお姉さんを虐めるんですつて……。

嶺 止せ。

千紗 嶺。あんたは何にも知らないのよ。だから黙つてらつしやい。あんたは、自分ぢや何でもかんでもひとり呑み込んだやうな顔してるけどね……ほんとは何にも知らないのよ。だから可哀想なの。妾嫌ひぢやないわよ、あんた。だけどね……それとこれと……は……。

勢喜 千紗、あなたもう寝たらどう。随分疲れてるらしいから。母さん宵からちやんとお床取つて、温めておいて上げたのよ。

日足 さうだ〜。さうしなさい。今夜はもう寝た方がいいね。

千紗 いやよ。こんなにみんな來てるのに、妾ひとり寢間へ入つて寝ちまふの。これから妾も遊ぶのよ。みんなで何かしませう、何か……暑いわね、この部屋。あすこの窓開けていい？（その方へ行く）

日足 私はぼつ〜失禮しよう。ちよつと寄つてみただけなんだから……。

勢喜 まあ、あなたおよろしいぢやございませんか、折角……。

嶺 僕も……。

千紗 こら〜。みんな歸つちや駄目よ。折角妾が歸つて來たのにみんな行つちまふつてことが（窓が開かないもんで）嶺さん、ちよつと手傳つて。ひとが困つてるのに氣が利かないな。

舞子 駄目よ。栓がささつてるぢやないの。（開けてやる）

千紗 有難う、お姉さん。仲良ししようね。（窓枠へ腰かけようとしてやり損ふ）

舞子 危ないわよ、そんなことして。庭へ落つこちたらどうするの。（子供にするやうに上げてやる）そらそら、ちやんとして……。

千紗 （舞子の肩を押へたまま）みんな、お坐りなさいつたら、そんなに突立つてゐないでさ。妾がお酒飲んで來たからつてそんなに、逃げるやうにしないで。日足さん、（嶺を指して）あの人ね、何時か云つたでしょ、妾の好きな人よ。

男二人苦笑する。

日足 大變な御氣嫌だが、何處へ行つて來たんだい、今日は。

千紗 今日ね。初めは、久賀先生んところへ行つたのよ、遊びに来い〜つて云ふもんだから、大學の先生よ久賀……久賀何とか云つたつけ、嶺さん知つてるでせう。

嶺

千紗 ———  
そしたらね、お客さまがみえて、それからみんなしてホオル行つちやつたん。

嶺 またホオルか、いつそのことダンサアになるといいんだな。

千紗 自分が踊れないもんだから偉さうに云つてらア。面白いわよダンスつて。(舞子に) ねえ。あんたにも教へたげる。そのうち……一度やりだしたら、とても……。

嶺 教へて欲しくないよ、そんなもの……。

舞子、ちよつと手をあげてそれを制し、耳をすませる。

舞子 (勢喜に) 母さん、起きた。違ふかしら。

千紗 誰? ああ、連れてらつしやいよ、此處へ。妾が遊んでやるわ。嶺さん、あんた子供好き?

嶺 一概には云へないな。僕を好いて呉れる子供なら好きだよ。

勢喜、出て行く。

千紗 あの子はどうかなあ。あんたみたいに始終恐い顔してる人、子供は厭がるわよ。

舞子 (話を外らして) そいで、今迄遊んでたの、ホオルでずうつと……。

千紗 ううん……それからね……バアへ行つたのよ。みんなして。面白いところよ。みんなが面白がつて妾に……嶺が恐い顔してるから止さう、この話。何云つてやがる、そんな事を氣にする柄かい。

嶺

千紗 日足さん、日足さんつたら。

日足 何だよ。

千紗 あの人のね、妾に奥さんになれつて云ふのよ。どうしようかしら、妾。

日足 いいぢやないか。

千紗 さう。いいかしら。

嶺 止せよ、おい。

日足 あなたにしたつて、お姉さんにしたつて、何れは何處かへお嫁に行かないやならないんだから、さう云つて下さる人があつたら、私はいと思ふな。

嶺 僕はもう歸るよ。また正氣の時にやつて来る。(立上る)

千紗 (飛び下りて、嶺の傍へ行く) 厭！歸さない。

嶺 歸つたつていいぢやないか。

千紗 いやよ、そんな怒つたやうな顔をして歸つちまふの。後で淋しいんだもの。

嶺 怒つてやしないよ、何も。だが今日は君は酔つてるんだ。もう黙って寝たまへ。後で疲れるぜ。そんなに飲めもしないんだらう。

舞子 さうよ、飲んで歸つた晩はきまつて妾が介抱役よ。

千紗 お姉さん、あれで強いのだよ、とつても。いくら飲んだつてぴりつともしないから呆れたもんだ。

嶺 やれ／＼、あんたもやるのか。

舞子 好きぢやないわ。さう云ふ質なの、幾ら呑んでも酔へない……。

嶺 どうも驚いた女達だな。

千紗 何感心してるの。愛想が盡きた？

嶺 それや、ずっと前に盡きてるがね。

舞子 ほんとに嫌はれるわよ、いい加減にしとかないと。

千紗 あんたみたいなの男も少いわね。酒は嫌ひ、煙草は喫はん。

嶺 女も嫌ひ、と迄はいかな。

千紗 はッ、それなら岩見重太郎だ。

嶺 何だい、岩見つて……。

千紗 何時か聞いたわよ、ラヂオで。

嶺 ああ云ふことだけは憶えてやがる。

千紗 寝よう〜。また叱られさうだ。寝るわよ、嶺。お寝み、日足さん。寝るわよ。

日足 ああ、お寝み。

千紗 (戸口のところまで立止つて) 妾、とつてもよく寝るのよ。自分でも可笑しいくらゐ。さう〜(日足に)何時か雲仙へ行つたでせう船で……(舞子近づいてくる) 船へ乗つかるといきなりぐう〜……景色も何も見られなかつたわ、折角楽しみにしてたのに……可笑しかつたわねあの時は……お晝過ぎんなつてボオイさんが起こしに來て呉れる迄死んだやうに寝てたわ……そしたらボオイさんが來てね……お父さんはもう御飯をお済ましに……お父さんは、つて云ふの……(クス〜笑ふ)

舞子、黙つて千紗を引つ張つて出て行つて了ふ。千紗の「お父さんだつて……」と繰り返し云ふ聲。笑ひ聲。

間。

日足 (何時迄も黙つてゐるのが不安らしく) 失禮ですが……。

嶺 何かお話ですか。

日足 いや、さう云ふわけぢやア……。

嶺 僕は前の家の方が好きですね。借家普請のくせに厭に大ま、からしくみせてあるのが癪にさわる。底が見え透いてね。

日足 ?

嶺 此の頃は流行るんですかね、かう云ふのが。

日足 さあ、どうですか。建築に興味をお持ちですか。

嶺 御冗談でせう。僕は銀行員です。給料は……。

日足 いや、さう云ふことは……。

嶺 給料だけは、餘計なことでしたかね。

日足 突然、こんなことを云つて何だが、あなたは千紗を、本當に貰つてやつて下さる氣がお有りですか。ぶちまけた話です、これは。

嶺 それを、あなたに御返事するのは、少し筋が違ふと思ひますね、僕は。

日足 まあ、さう喧嘩にならんで下さい。折入つての話なんです。あなたと私ぢや、年も違ふ。此處で喧嘩をしても始まりんと思ふんだが。

嶺 殴られるのは痛いでせうからね。

日足 痛いも痛い、話がわからんでは意味ないぢやありませんか。

嶺 (笑つて) 話がわかつたら殴つてもいいんですか。

日足 餘程自信がお有りらしいですな。

嶺 ボオトを少しやつた経験があるもんでね。體にはいいですよ、仲々。喧嘩に使つてみたことはまだないんだが。(腕を撫する)

日足 私は喧嘩は不得手です。どうしても殴ると仰しやるんだつたら、逃げて歸りますよ。

嶺 逃げるはよかつた。

日足 しかし、考へてみると可笑しい。私があなたに殴られるのは可笑しい。さうぢやありませんか。ねえ。

嶺 (顎を撫でてゐる)

日足 私があなたを殴ると云つたら、あなたはどうします。

嶺 (苦笑して) さうですね。しかし、どうしてあなたは、僕に殴られさうだと思つたのです。

日足 (之も苦笑して) さあ、何故でしたかな。さう云ふ氣がしたのですね、ぼんやり。

嶺 その方が自然だつたんぢやないかな。僕も殴りさうな氣がしましたよ。何としても、しかし、それや逆ですよ。そんな可笑しな話はないな。

日足 順序から云へばね。何なら、始つからやり直してもいいです。

嶺 やつぱり私に引け目があるからですな、これは。

日足 莫迦な!

嶺 お話ししなけりやわからないんだが、かう云ふことになつた理由と云ふのが、ちよつと厄介なんでして……。

日足 その前に、お伺ひしたいんですが……あの子供は……何方の子供です、二人のうち……。

日足 ——。私の……。

嶺 (唸る) 何方かのだとは思つてたが……。

日足 さうはみえんでせう。

嶺 酷い人だな。あなたは。

日足 まあ、さう責めんで下さい。その代り今なつて困つてるんですから。困ることはないぢやありませんか。何も。若くて、美しくつて、それに……。

日足 さう突つ離されるとそれ迄の話だが。眞面目に聞いて戴けんかな、ひとつ……。

嶺 ——

日足 實は、あれの姉さん、舞子ですがね、あの人……まあ、酷い肋膜をや

つて、とても困つてたらしいんですね、その頃。それをこつちがちつとも知らなかつたもので、こつちはただの遊びのつもりだつたが、向ふにしてみると……。

嶺　それが、どうしたと仰しやるんです。面目づくで老人と遊ぶと云ふのは、それは、あるかもしれないが、まづ無いと云つていいでせう。千紗がさう云ふ例外でなかつたとしても……それや別に……。

日足　あなたにはわからんかもしれないな、千紗や舞子が私をどう思つてゐるかと云ふことが……。

嶺　別に怨んでると云ふわけでもないでせう。兎に角あなたのお蔭で……（部屋の中を見廻す）なるほどね……。

日足　いや、そこですよ。そこところが私にも納得がゆかないのです。女を世話して、おまけに怨まれるんぢや割の悪い話ですからな。

嶺　話が袈裟でもうひとつ實感が伴はん。ここの家の人間がそれほど潔癖だかどうだか……。

日足　それは、此の頃の千紗のやつてゐることを御覽になればわかると思ふんだが。以前はああでもなかつたのです。

嶺　以前はね。（間）さうでせう、それや、千紗の感情が子供だと、云ふことも出来る。

日足　いや、さうかもしれません。しかし私は子供のお守りなら自分の子供だけで澤山です。もうあれには躰いて行けない氣がしますよ。まったく仰しやるとほり此の頃の若い女のやることには際限つてものがありませんな。

嶺　は！は！は！

日足　いや、笑ひごどぢやないですよ。それに御承知のとほり、ここの家庭と云ふのが以前は……。

舞子。

嶺 もう寝たの。

舞子 まだぐづく云ってるわ。仲々寝やしないのよ、あんなことばかり云つて。平常正気で云へないことを、あんな時云ふのね。態と酔っ拂つたやうな顔をして……。

嶺 そいつは、どうか……。

舞子 今日初めてのことぢやないのよ。

嶺 時々あるのか、あんなこと。

舞子 あんた初めて？

嶺 ん。仲々面白いぢやないか。

日足 私は失禮しよう。大分遅くなつたやうだ。

嶺 まあ、いいぢやありませんか。僕ももう引き上げます。

舞子 あんた、もう少しゐらつしやい。話があるの妾。

日足 ぢや。

舞子 さうですか、失禮致しました。母さん！お歸りになりますよ。（扉を開ける）

日足 （嶺に）あなたさへ了解して下さいなら、子供のことは何とでも……。  
嶺 （苦笑して）まあ、考へときませう……。

日足、出て行く。

舞子、直ぐ扉を締める。外で勢喜の聲がして、やがて、表戸の開く音。

嶺 何だい、話つて。

舞子 あんた、気がついたでせう。

嶺 何さ。お爺さんのことか。

舞子 もつと早く気がつくかと思つてたのよ、妾は。

嶺 何となく感じてはみたんだがね。

舞子 まだ、さう云ふ経験がないからよ。見る人がみれば、直ぐわかる。

嶺 子供は、あんたの子かと思つてたよ。

舞子 妾もさうぢやないかと思つてたのよ。さうならさうにしとけばよかつた。

嶺 酷いことを云ふな。何だつて黙つてたんだ、そんなこと。

舞子 自分で云ふと思つたからよ。妾の口から云へるものか。

嶺 それや、まあ、さうだが。それでわかつた。

舞子 何が。

嶺 いや、何でも。彼奴も案外氣が小さいんだな。

舞子 小さいのよ、とても。だからこんなことになつちやつたのよ。

嶺 相談づくか。

舞子 かう云ふこと？ まさか。妾が承知すると思つて？

嶺 それや、あんたは知らんかも知れないが、お母さんは……。

舞子 母さんも知らなかつたのよ。みんなが知つた時にはもうどうにもならない時だつたの。

嶺 やつぱり殴つてやればよかつたな。胸糞がわるい、どうも。

舞子 誰？

嶺 お爺さんに聞いたよ。

舞子 妾、あのまま療養所から歸らなければよかつたと思ふわ、時々……。

嶺 それぢやアあの子が助からないだらう、折角……。

舞子 莫迦よ、あの子は。幾ら子供で考へがないつたつて……そんなの……。

嶺 少女小説の影響だらう。そんなのなにか。するとラヂオの方かな、やつぱり。(考へて)十七くらゐで子供を慥へるやうな女は、生れつき違ふの

かもしれんな。

舞子 自分ぢや、自分のやったことが妾達に知れたら決して喜ばれないつてことを、よく知つてるのよ。それやさうぢやないの、いくら命が助かりたいつたつて……また母さんにしたつて娘を……。

嶺 後から云へばさうだらう。

舞子 見栄なのよ、あの子の。助かりたくなんかないわよ。

嶺 昔の生活の禍だな。

舞子 (惱ましく) さうなの。さうなのよ。そんな氣になるものかしら。いつそ不思議な氣がするわ。他に方法がないわけぢやないでせう。

嶺 (慰さめる氣で) 濟んぢやつたことは仕様がななさ、たた僕の氣に喰はんのは、その後だがね。

舞子 後なんかどうだつていいぢやないの。

嶺 よくない。あんたと千紗の生活の何處が違ふ。違ふのはただ……まあ、そこ迄は云へんがね……。

舞子 構はないわよ、云ひたけりや云つたつて。

嶺 よく知らんからね、僕は。だが、煙草は喫ふ、酒は飲む、男の取巻は慥へる。妹の不良を獎勵してるとしかみえないがなア。

舞子 妾、これで一生懸命なのよ。それより他に妾があの子にしてやれることつてないぢやないの。こんなことつて思つたほど樂ぢやないわ。

嶺 さういふことがかい。賣場で八時間立ちつ切りなのよりは樂だらう。

舞子 あの子のやることと云へば、何でもやつてみたわ。ただあの子のやったことで妾のしなかつた事と云へば……だつてそれや無理よ……あの子には、善い悪いを忘れて夢中になつて了ふ理由があつたけれど、妾にはそれが無いんだもの、それ迄は出來やしないわ。

嶺 さう云ふ愛情が正常なものとは思へんよ、僕には。

舞子 手を取つて泣けばいいんでせう。さうすればよかつたのかもしれないわ。

嶺 ——（苦笑する）

舞子 でも、妾にはそんな出来なかつたの、とても。そんな小さな出来事とは思つて済ませなかつたのよ。

嶺 その氣持が千紗に通じてゐるかどうか、怪しいもんだと思ふ。

舞子 通じ？ 通じる通じないの話ぢやないわよ、もう。

嶺 しかし、それがわかればいいんぢやないか。わからないからいろいろな…。

舞子 銀行屋だけあつて、云ふことがはつきりしてるのね。あんたの云つてることはよくわかるのよ。

嶺 （頭を搔いて）銀行屋は恐縮だがよくわからん。

舞子 もういいの。わからなくなつたつていいのよ。あの子は莫迦な女だわ。妾だつてさうよ。でも…いいの、それでいいのよ。可笑しいかしら。迷信みたいなものね。

嶺 神祕主義だな。

舞子 構やしないわ。それだのにあの子は、妾や母さんの前へ出るとびく／＼してるのよ。始終びくびくして、みてゐられないのよ。自分を恥じてるのね。だからたまらない氣がするの妾は。

嶺 それは、さうかもしれんな。

舞子 あの子の氣持を安心させる爲になら、妾どんなことでもしてやりたいと思ふの。今に、してやるわ。どんなことだつて、やらうと思へば出来るわ妾だつて。

嶺 止せよ、氣味の悪い。厭だよ、そんな變な話を聞くのは。こつち迄妙な氣になりさうだからな。迷信のお附合ひなんて眞平だよ。

勢喜。

勢喜 舞子。あなた、何か云つたの千紗に。

舞子 別に何にも云はなかつたわ。どうして。

勢喜 酔つてるんだから、夜着を外してるといけないと思つて覗いてみたら  
あなた、寝てやしないのよ、あの子。

舞子

勢喜 蒲團を頭からスツポリ被つてるから、よくはわからないけれど(嶺に氣  
を兼ねて)確かに泣いてるらしいんだよ(溜息)。

間。

嶺 ヒステリイの一種だな。さう云ふ徴候があるものだ。

舞子 妾、見てくる。(行きかける。止る。嶺に)どつちがいいかしら。

嶺 放つておくのと?

舞子 (哀訴するやうに) あんた、行つてみてやつてくれない?

嶺 女の寢室なんて、入つたことがない。

舞子 いいわよ、そんなこと。

嶺 しかし……(躊躇する)

勢喜 舞子!

舞子 いいのよ、母さん。二階へ上つて右の部屋よ。

嶺 (決心して) 神祕主義だぞ、いよゝ。えい、どうともなれ。(入つて  
行く)

勢喜 そんなにして、ほんとにいいのかい舞子。

舞子 心配しなくつたつてよろしい。母さんは何にもわからないでゐる方が  
仕合せなのよ。

勢喜 だつて、嶺さんつて、どう云ふ人だか妾にはまだよくわからない。大丈  
夫なんだらうね。

舞子 大丈夫にも大丈夫でないにも、千紗や妾達の暮しなんてこれ以上危な  
くなりやうがないぢやありませんか。

勢喜

舞子 妾、母さんに何か云つてるんぢやないわよ。嶺つて人は平凡な男よ、大  
學の法科をやつと出て、銀行かなんか勤めてゐる、ちよつとその邊を  
見廻したらザラにゐる種類の……でもさう云ふ當り前さつて云ふもの  
が妾達にはないんでせう。千紗だつて、ひよつとしてさう云ふ當り前な  
暮らしをもう一度する氣になつてくれたら、それが妾達の仕合せぢや  
ないかしら。

勢喜 それは、千紗がさうなつてくれたら、母さんだつて嬉しいと思ふけれど  
……。あの方はまだ、いろんな事をまるで御存知ないんだらう。

舞子 知つてるわ。妾、みんな喋つちやつた。それよりも前から、薄々氣は附  
いてたらしいの。

勢喜 そんな事を知つてて、どうして……。

舞子 あの子が自分で云へばよかつたのね。それが云へなかつたのよ、きつと  
だから、自分ひとりで苦しい思ひをしてたのよ。あの子のは何時だつて  
さうなのね。

勢喜

親娘や姉妹の間でそんなことつてないと思ふよ、母さんは。どうして、  
そんなに水臭いことしなきやならないんだらう。妾だつて、あの子の爲  
になら、どんなことでもしてやります。何も自分が思ひに餘る事がある  
からと云つて、黙つて何處かで酔つ拂つて歸つて來なくつたつて、ひと

こと母さんに……(涙ぐむ)

舞子 妾達の愛情が足りないのよ、やつぱり。あの子の爲にならどんなことでもしてやる、それがいけないのよ。こんな風に考へてる間は、どうしてもあの子の本當の心に近づく事は出来ないんだわ、きつと。

勢喜 母さんには、もうこれ以上は務まりません。あんた達二人して母さんを困らせてゐるとしか思へませんよ、妾には。

舞子 何云ふのよ母さん、つまらない。

勢喜 さうぢやないか。お父さんが生きてゐらつしやつたら、まさかこんなことにはならなかつたと思ひます。みんなして母さんを蔑にするんです。何一つ母さんに相談もしてくれず、打明けても呉れず、それで母さんは、お父さんの傍へ行つてどう云つて申し譯をします。子供達は立派に私の手で育ててみせます、さう受合つた云ひ譯がどうして出来ます。

(泣く)あなた達にはもう母娘の情愛つてものがまるで……。

舞子 母さん〜。泣かないで下さいよ。母さんを蔑になんか誰もしてやしないわよ。さ。嶺さんがゐるぢやありませんか。

勢喜 みんな、それと云ふのも母さんがいけないからなんです。母親としての務めを……満足にして上げられなかつた妾の……。

舞子 (勢喜の肩を押さへて)そんなことないわ、母さん。母さんの所爲ぢやないのよ。さ、もう止して頂戴。これからだん〜妾達もよくなるわ。千紗さへ、仕合せになつて呉れたら、妾だつてお嫁入りします。お嫁入りして母さんに、孝行して上げます。

勢喜 孝行なんかして戴かなくつて、ようござんす。ただ、みんなが前のやうに……。

舞子 だから、みんなが前のやうになれるわ。妾だつて、他所の人のやうにお嫁入りはしたいわよ。だけど千紗ひとりあんな風にさしといて、どうし

て自分だけが平氣でお嫁入りしたり、他所の人と同じやうにお店に出たり出来ます。あの子の身體さへ極つてくれたら、妾だつて自分のことはちやんとします……だから……。

勢喜 お前……ほんとかい、それ。ほんとだらうね、千紗さへよくなつて呉れたら……。

舞子 ほんと。ほんとよ、母さん。(ほろりとする)

嶺。

嶺 (顔の色が変わつてゐる)あの子はヒステリイだと思つてゐたら、あれや、ほんものの氣狂ひだ。僕はもう失敬しますよ。

舞子 (慌てて)まあ嶺さん、どうしたの、あなたに何を云つたと云ふの、あの子が。

嶺 どうもかうも、お話にならんです。あの子は、あのお爺さんと別れることが出来ないとわかつたのださうだ。親子ほど年の違ふ男と別れることが出来ん。これは君、神祕主義どころの騒ぎぢやないよ。

舞子 まあ！

嶺 僕はもう、あんな子と遊んでゐるのは御免だ。實に不潔極まる。

舞子 妾達の暮らし向きやなんかのこと考へてるんぢやないのかしら。それなら妾だつて……。

嶺 それも云つてみた。だがさう云ふことぢやないらしい。

舞子 ちよつと待つて……待つてね(出て行かうとして引戸を開ける。嶺を追つかけて出て來たらしい千紗とぶつかりさうになる)あら！

間。

舞子 あんた、ほんとなの、それ。

千紗

――

舞子

嘘だらう。また何時もの嘘なんでせう。ええ。さうでせう。

千紗

――

勢喜

（まるでがっかりして）嶺さん。あたしやもう、死んでしまひたうござ  
います。こんな話を聞いてゐるくらゐなら、いつそ亡くなつた主人の…

…（云ひ止む）

底本 森本薫全集 第2巻

出版者 世界文学社

出版年月日 1952